

令和 6 年 5 月 27 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K05865

研究課題名（和文）高齢者の食意識・食行動・食事満足度に関する都市・農漁村の比較

研究課題名（英文）Urban-Rural Comparison of Food Attitudes, Eating Behaviors, and Dietary Satisfaction among Older Adults

研究代表者

石田 章（ISHIDA, AKIRA）

神戸大学・農学研究科・教授

研究者番号：50346376

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：定量分析の結果、1）男性は女性と比較して食意識が低くかつ食行動が乱れ気味であること、2）家族と同居していながら孤食頻度の高い男性高齢者は男性の独居高齢者と同程度に食意識が低くかつ食行動が乱れていること、3）経済的にゆとりがあり豊富な食情報を有する高齢者ほど良好な食生活を過ごしていること、4）栄養バランスのとれた食事の摂取比率について、東日本では都市部よりも農村部の方が高く、西日本では反対に農村部よりも都市部の方が高い可能性があることなどを指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

急速な高齢化の進展に伴い、高齢者の「食」に関してフレイル予防を目的とした栄養学・医学研究が活発化している。しかし、日々の食事が日常生活の重要な構成要素でありながら、高齢者の「食に対する満足感」や「食行動・食意識」に関する社会科学研究は緒に就いたばかりである。こうした状況下にあつて、大規模標本調査の個票データを用いて、食満足度や食行動・食意識に影響を及ぼす社会経済的要因を検討した点に学術的意義および社会的意義があるといえる。

研究成果の概要（英文）：The results of the quantitative analysis showed that 1) men have lower food consciousness and more disordered eating behaviors than women; 2) older men who live with their families but often eat alone have the same low food consciousness and disordered eating behaviors as older men who live alone; 3) older people who are economically well-off and have abundant food information have better eating habits; and 4) the dietary balance intake ratio is higher in rural areas than in urban areas in eastern Japan. 4) The dietary balance intake ratio may be higher in rural areas than in urban areas in eastern Japan and vice versa in urban areas than in rural areas in western Japan.

研究分野：食料経済

キーワード：高齢者 食行動 食意識 行事食 カテゴリカル共分散構造分析

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

最近急速に進展する高齢化への対処が喫緊の政策課題となっている。こうした状況を受けて、行政機関・民間研究機関・研究者らによる高齢者研究が活発化しており、高齢者の「食」に関してフレイル予防を目的とした栄養学・医学研究の成果が発表されている。しかし意外にも、日々の食事が日常生活の重要な構成要素でありながら、高齢者の「食に対する満足感」や「食行動・食意識」に関する社会科学的研究は緒に就いたばかりである。

### 2. 研究の目的

上記 1 で述べた高齢者を対象とした食研究の動向を踏まえつつ、本研究では、さまざまな大規模標本調査の個票データを定量的に分析することによって、高齢者の食に対する満足度や食行動・食意識に影響を及ぼす要因を解明することを主たる目的とした。

### 3. 研究の方法

さまざまな大規模標本調査(独自に実施したネット調査に加えて、内閣府あるいは農林水産省が毎年実施している「食育に関する意識調査」,NHK 放送文化研究所「食生活に関する世論調査」,内閣府「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」など)の個票データに、カテゴリカル共分散構造分析,多変量プロビット回帰,パネル回帰,多変量解析の検定法などの統計手法を適用することによって、高齢者の「食に対する満足感」や「食行動・食意識」に影響を及ぼす要因を分析した。

### 4. 研究成果

(1)最近、急速に進展する高齢化への対処が喫緊の政策課題となるに伴い、行政機関・民間研究機関・研究者らによる高齢者研究が活発化している。しかし意外にも、日々の食事が日常生活の重要な構成要素でありながら、高齢者の「食に対する満足感」や「食行動・食意識」に関する社会科学的研究は緒に就いたばかりである。こうした状況を踏まえて、内閣府あるいは農林水産省が毎年実施している「食育に関する意識調査」の個票データを用いることによって、高齢者の食行動・食意識や食事満足度を規定する要因を定量的に検討した。

「食育に関する意識調査, 2012」の個票データを用いた定量分析の結果, 1)75 歳以上の後期高齢者は 65 歳から 69 歳の高齢者と比較して、規則正しい食生活を過ごすように気をつけており、食事時間をより楽しんでいること, 2)男女問わず配偶者と同居している高齢者は食意識・食行動・食事満足度が高く、男女ともに独居高齢者は食意識・食行動・食事満足度が低いこと, 3)主観的健康感が高い高齢者ほど食意識が高く、栄養バランスのとれた食生活を取り、食事を楽しんでいること, 4)食に関する情報量をより豊富に有する高齢者ほど食意識が高く、望ましい食行動を実践しており、食事満足度も高いこと, 5)経済状況や居住地が高齢者の食意識・食行動・食事満足度に及ぼす影響は小さいこと, が明らかとなった。

さらに、2016 年調査と 2017 年調査のプールデータを用いて孤食が食意識・食行動に及ぼす影響を定量的に検討した結果, 1)男性は女性と比較して食意識が低くかつ食行動が乱れ気味であること, 2)家族と同居していながら孤食頻度の高い男性高齢者は男性の独居高齢者と同程度に食意識が低くかつ食行動が乱れていること, 3)経済的にゆとりがあり豊富な食情報を有する高齢者ほど良好な食生活を過ごしていること, が明らかとなった。

(2)わが国における高齢者の栄養バランスの特徴を解明すべく、内閣府・農林水産省「食育に関する意識調査」の個票データのうち、必要なデータが得られた 7 年分(2009 年, 2011 年, 2012 年, 2014 から 17 年)・全国の 20 歳以上の成人 13,851 人のデータを用いて定量分析を行った。具体的には、主食(ごはん、パン、麺など)・主菜(肉・魚・卵・大豆製品などを使ったメインの料理)・副菜(野菜・きのこ・いも・海藻などを使った小鉢・小皿の料理)を 3 つそろえて食べることが「ほぼ毎日」である予測確率を順序ロジットモデルを用いて推計した。その結果、予測確率は、1)男女全体では、20 歳代の 42.6%から 70 歳代では 74.3%と高くなるが、80 歳代では 71.5%に若干低下すること, 2)男女別に比較すると、男性では 70 歳代で 73.0%と最も高く 80 歳では 64.0%に急落する一方で、女性では 80 歳代が 79.0%と最も高いなど、とくに後期高齢者の男女間で大きな差が認められること, 3)性別に関係なく家族と同居・共食している高齢者がほぼ 80%と最も高い水準にあること, 4)女性の場合、単身あるいは家族と同居していても共食していない 70 歳代の高齢者では 60%台と低いものの、80 歳代では家族と同居・共食している者と差が認められないこと, 5)これに対して、男性の場合には、単身および家族と同居していても共食していない高齢者では、家族と同居・共食している高齢者と比べて明らかに低水準にあること, 6)関東を除く東日本が他地域よりも若干高水準にあること, 7)東日本では都市部よりも農村部の方が高く、西日本では反対に農村部よりも都市部の方が高い可能性があること, などを指摘した。

また国際比較を目的として、中国都市部の調査データを用いて分析した結果、社会経済水準や他要因の影響を除去しても、加齢に伴い肥満傾向が認められることを確認した。

(3) NHK 放送文化研究所「食生活に関する世論調査, 2016」の個票データ(65歳以上の高齢者649名)を用いて高齢者の食事満足度と食意識に関する定量分析を行った。その結果, 1) 男性の方が女性よりも若干ながら食事満足度が高い一方で, 食意識に関しては女性の方が高いこと, 2) 男女ともに独居高齢者の食事満足度が最も低いこと, 3) 家族と同居している高齢者であっても, 孤食頻度の高い高齢者は性別に関係なく食事満足度・食意識が低いこと, 4) 食費が家計の負担になっていると感じていない高齢者ほど食事満足度が高いこと, 5) 男性の独居高齢者は欠食や栄養バランスに気をつけていない確率が高く, 出来合い・弁当やインスタント食品への依存度が高いこと, 6) 人口5万人未満の市町村に居住する高齢者は, 食意識が有意に低い可能性があることが明らかとなった。

(4) 食にかかわる倫理的消費について, 独自調査の個票データ(関東圏に居住する20歳以上の成人600名)を用いてカテゴリカル共分散構造分析を行った。その結果, 1) 倫理的消費に関する情報量・印象・意見, 環境意識, 食習慣などの因子が成人の倫理的消費行動に影響を及ぼしていること, 2) 高齢者は若年層・中年層と比較して倫理的消費行動をとる傾向にあること, 3) 前記2)の背景として, 高齢者の場合, 特に環境意識と食習慣の因子の影響が大きいこと, を指摘した。

(5) 内閣府「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」の第1回と第2回調査を用いて, 日常生活に関する生活満足度について混合効果モデルを用いて分析を行った。その結果, 高齢者の満足度は, 感染症拡大初期に他の年齢層よりも大きく低下したものの, 第1波終息後には感染拡大前の水準までほぼ回復していることを明らかにした。

(6) 和食文化は2013年にユネスコ無形文化遺産に登録されるなど世界的に注目を集めているが, 次世代に十分に継承されずその特色が失われつつある。しかし, 全国規模で実施された調査データを用いて行事食の喫食頻度に影響を及ぼす要因を検討した研究は限られている。そこで, 全国規模で実施されたNHK放送文化研究所「食生活に関する世論調査, 2016」の個票データを用いて, 行事食の喫食頻度の規定要因について定量的に分析することを目的とした。多変量プロビットモデルを用いた定量分析の結果, 行事食の喫食回数が多い成人は, 女性であること, 家族と同居・共食していること, 世帯年収は700万円以上であること, 中・高齢者であること, 子ども時代に親との調理頻度が高いこと, 健康状態が良好であること, 食生活に関する満足度が高いこと, 農村部と比較して大阪などの都市部に居住していることが明らかとなった。

(7) 農林水産省「令和元年度食育に関する意識調査」の個票データを用いて, 伝統料理や食事作法の継承に関する定量分析を行った。その結果, 伝統料理や食事作法を継承している確率が高いのは, 女性, 中高齢者, 子どもの頃に良好な食生活を送っていた者, 人口規模が最も小さい町村に居住している者であることが明らかとなった。さらに, 伝統料理や食事作法を継承している者のうち, 次世代にこれらを伝えたいと思っているのは, 女性, 中高齢者, 15歳未満の子供や孫と同居している者, 食意識が高い者であることが明らかとなった。

以上を総じてみれば, 1) 喫食比率を比較すると, 行事食は都市部で高く, 郷土料理は農村部で高いこと, 2) 中高齢者は行事食の喫食比率が高く, 伝統料理や食事作法の次世代継承にも積極的であるといえる。

(8) 伝統的な行事食は日本固有の和食文化の重要な構成要素であるが, 若年層を中心にその喫食率は低下傾向にあると指摘されている。全国規模で独自に実施したインターネット調査(対象者数2000人)の個票データに共分散構造分析を適用することによって, とくに子ども期の食経験に着目しつつ行事食の継承意向・喫食頻度・イメージに影響を及ぼす要因を定量的に検討することを目的とした。対応のあるt検定と効果量の推定値から, 分析対象とした18行事食のうち, 子ども時代と比較して喫食頻度が増加したのは節分の恵方巻きであった。これに対して, おせち料理, 正月の雑煮, 節分の福豆, 節分のひなあられ, 節句の柏餅・ちまき, 彼岸のおはぎ・ぼたもちは喫食頻度が有意に減少していた。

さらにカテゴリカル共分散構造分析による推定結果から, 性別・年代の個人属性, 現在の経済状況, 子ども時代の経済状況や食卓環境が行事食の喫食頻度・次世代への継承意向と行事食に対するイメージに影響を及ぼすことが明らかとなった。より具体的には, 1) 女性, 2) 中高齢者, 3) 現在の経済状況が良好な者, 4) 子ども時代の経済状況が良好であった者, 5) 子ども時代の食卓環境が良好であった者ほど, 行事食の喫食頻度が高く次世代への継承意向と行事食に対する良好なイメージを有していると考えられる。しかし, 核家族化の進展などによる家族構成の変化もあって, 行事食の継承意向が相対的に高くかつ行事食の喫食頻度も高い高齢者から若年者への継承が家庭内で円滑に行われなくなってきており, 家庭外での継承プログラムの強化(例えば学校給食等を通じた行事食の普及)が必要であることを指摘した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 9件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Ishida Akira, Ishida Emiko	4. 巻 1
2. 論文標題 Changes in Daily Life Satisfaction among Community Dwelling Elderly during the COVID-19 Pandemic in Japan	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Ageing and Longevity	6. 最初と最後の頁 3~10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3390/jal1010002	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 岡本美咲、石田章	4. 巻 30(4)
2. 論文標題 アニマルウェルフェアに対する消費者評価に関する考察 - 飲用乳を事例として -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 農業市場研究	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 石田章、濱口佳大、岡本美咲	4. 巻 33(1)
2. 論文標題 行事食の喫食に関する研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 開発学研究	6. 最初と最後の頁 60-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Ishida, A., Ishida, E.	4. 巻 23(2)
2. 論文標題 Effect of eating alone on dietary practice in community-dwelling elderly in Japan	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Progress in Nutrition	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.23751/pn.v23i2.9085	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Ishida, A., Ishida, E.	4. 巻 29(1)
2. 論文標題 Which consumers are least likely to have a balanced diet in Japan?	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Pertanika Journal of Social Sciences & Humanities	6. 最初と最後の頁 419-438
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.47836/pjssh.29.1.23	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ishida, A. and Ishida, E.	4. 巻 13(4)
2. 論文標題 Which Japanese older adults are least likely to enjoy favorable dietary practices?	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 International Journal of Gerontology	6. 最初と最後の頁 330-334
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.6890/IJGE.201912_13(4).0013	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ishida, A., Li, Y., Matsuda, O., Ishida, E.	4. 巻 28(1)
2. 論文標題 Factors affecting adult overweight and obesity in urban China	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Pertanika Journal of Social Sciences & Humanities	6. 最初と最後の頁 503-513
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 谷口桃子・石田章	4. 巻 69(2)
2. 論文標題 成人女性の食行動・食意識の規定要因に関する考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 食農資源経済論集	6. 最初と最後の頁 25-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 牧野このみ・石田章	4. 巻 27(1)
2. 論文標題 貧困の世代間連鎖と食生活に関する考察 多母集団の同時分析による男女比較	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 農業市場研究	6. 最初と最後の頁 68-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 石田章, 守永有咲, 石田絵美子
2. 発表標題 高齢者の食意識・食行動・食事満足度に関する考察
3. 学会等名 日本フードシステム学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------